

深沢克己著

『マルセイユの都市空間』

——幻想と実存のあいだで——

地中海都市を代表する南仏の港町マルセイユ。これまでこの都市はどのように表象されてきたか。開放感と異国情緒にあふれた都市、あるいは治安の悪い街といったものだろうか。本書は、マルセイユのさまざまな表象がいかなる歴史的起源をもち形成されてきたかを、長くこの都市を観察して

きた著者が「他者性」をめぐる言説を軸に検討したものである。

本書の前半では、内陸から政治的に独立したフォカイア人植民市マッサリア、内陸の権力者プロヴァンス伯に対して一定の自律性を求めた中世都市共和国マルセイユ、「コスモポリタン」性を象徴するルイ一四世期の自由港マルセイユについて、それぞれの歴史と近代における記憶・表象のあり方が叙述される。これらの記憶によって、近代国民国家形成期のマルセイユでは、一方では内陸フランスの一部であると同時にそれとは異なる独自の文化的起源をもつ「他者」として肯定的に、他方では北フランス中心の政治・経済から排除される「他者」として否定的に自己をとらえる認識があらわれたという。

内陸フランスとの関係を分析した前半に對し、後半では、「東方の門戸」、「美観なき都市」という表象を軸に、地中海世界との関係が検討されている。一九世紀に定着した「東方の門戸」という詩的表象とは裏腹に、同時代、とくに第三共和政期の「移民の町」マルセイユは、イタリア人労働者を数多く抱える貧困で劣悪な「イタリア都

市」であった。労働者街区は自然発生的に形成され、また一九世紀を通じて都市計画が挫折をくり返したことから、マルセイユは「美観なき都市」とみなされるようになっていく。二〇世紀、とくに第二次世界大戦後には、顕在的「他者」としてのアルジェリア人移民が大量に移住し、彼らが居住した市の「顔」である中心部は、「アラブ化」の様相を呈した。しかし、一九九〇年代からは、移民との共存を目指す「混合社会」の形成を前提とした都市整備が進められており、著者は、マルセイユが現代世界において融和と相互理解の模範的事例となることを期待して、本書を締めくくる。

本書の最大の特徴は、ある一都市をめぐる表象の起源と形成を約二、六〇〇年にもわたる歴史とからめて論じたことにあり、それが容易な仕事でないことはいうまでもない。また、本書の性格からその叙述は断片的であるものの、日本語でマルセイユの歴史にふれられるものとしても貴重な成果である。さらに、近代史を専攻する紹介者には、古代マッサリアや中世都市共和国、近世の自由港の記憶が、国民国家の形成期である近代において特有の意味をもったこ

とが興味深かった。ここには、中央由来の国民国家形成に対する一地方都市の反応がうかがえる。

最後に、本書を一種の「観光案内」として実際にマルセイユに赴くことをおすすめしたい。紹介者もたびたびマルセイユを訪れたが、本書の読了後に自戒もこめて感じたのは、都市に対する印象や風聞の歴史性に無自覚であつたことである。本書を読了した今、以前とは異なる視点で都市マルセイユを眺めることができるだろう。

この意味で、本書の射程はマルセイユをも超える。都市の表象に関心をもつて、ある都市を見聞しながらその歴史的起源や形成のあり方に思いを馳せる重要性を本書は教えてくれる。これもまた、歴史学の醍醐味の一つであろう。

(四六判 一九九頁＋六頁 二〇一七年六月)

刀水書房 二〇〇〇円＋税)

(谷口良生 京都大学大学院文学研究科

博士後期課程)